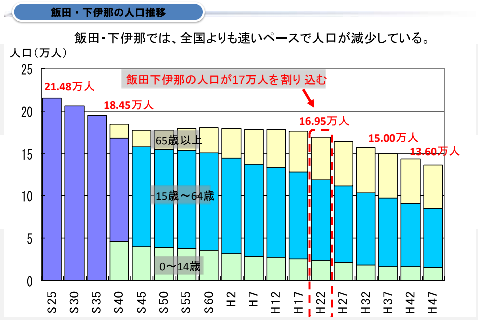
飯田・南信州地域における「地域ステークホルダーの連携」と「事業モデル」づくり
【関東ブロック　長野県飯田市・南信州地域　（しんきん南信州地域研究所）】

別添資料1

地域課題

●少子高齢化、人口減少による経済の縮小
●グローバル化により、大手資本の進出があり、地元資本の縮小



事業目的

●地域課題の発掘、課題解決の可能性を見いだし、マルチステークホルダーをつなぐことにより、ビジネス化を支援し、その循環を　起こし、地域の自立化に貢献していくこと

事業概要

●取組1

セミナーを通じて課題の掘り起こしと、解決策のとりまとめを行った。
セミナーでは、講演、交流会、グループ替えを行いつつワークショップを行い、事業化構想をまとめた。

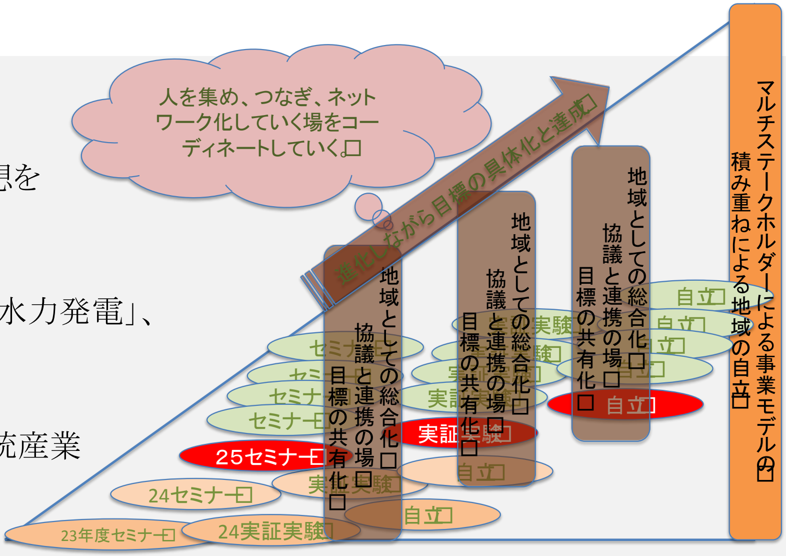
●取組2

取組1でまとめた事業化構想のビジネスモデル化を検討した。今年度は、「地縁型小型水力発電」、「古民家出産」、「空き家対策」の3つのプロジェクトを推進した。

●取組3

広域連携による展開をはかる取組。今年度は、京都と東京の大学と連携して、飯田の伝統産業「水引産業の再生」に取り組んだ。

取組1、2、3が並行的に進んでいるのが、当NPOの取組の特色でもある。



事業成果

取組1:　5つのテーマでの提案がされ、「空き家対策」をテーマにコーディネート組織とビジネス展開の提案を取組2につなげた。

取組2:　「地縁型小型水力発電」では申請準備に、「古民家出産」は今可能なビジネスの積み重ねにより目標へのアプローチにつながり、「空き家対策」については「コーディネート組織」と「空き屋のリニューアル提案」と「窓口機能とPR・相談機能」を持つプライベートショップの提案へとつながり、取組を始めた。

取組3:　飯田の伝統産業である「水引産業の再生」に京都と東京の大学と連携して取組み、12社のヒアリング等を通じて課題を明らかにし、学生からの提案を受け、水引組合との検討会を経て、来年度「水引の日の制定」による地域間連携などに取り組む予定。

中間支援における工夫や苦労した点

◎中間支援において特に工夫した点

用いた手法は、セミナー等の開催、ワークショップの開催、個別の話し合い、交渉など目新しいものではなく、ごく普通の手法である。具体的には、話の進め方、話し方が重要であり、相手の意見を良く聞き、否定せず、しかし相手の先入観を取り除き、自分も関係者だと感じ、共感し、参画しようとする「自分ごと化」するようにした。それぞれのステークホルダーの負担と利益を天秤にかけ、win-winの形でのビジネスモデルの構築を行うよう心がけた。

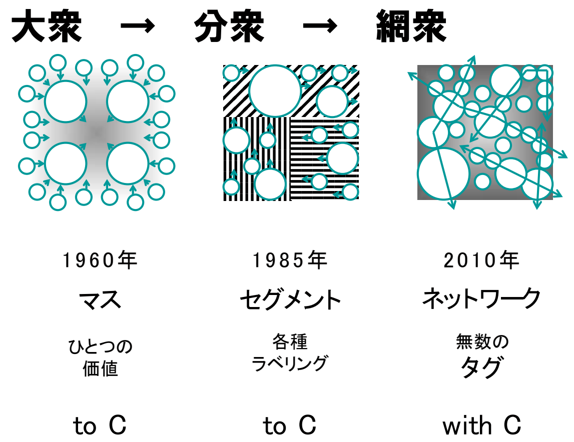
◎中間支援にあたり苦労した点、うまくいかなかった点

カタリスト的支援を徹底したが、支援対象との距離感とペース配分、関与のタイミングなど苦労した面があり、趣旨を理解されない場面もあった。

また、参加者の経験が豊かであることから、従来の固定観念にとらわれやすいことや、課題を挙げて一般化し泥沼化しやすい議論展開に陥るときもあった。

また、制度上の問題のように、自分たちの力だけではどうしようもなく暗礁に乗り上げ、時間を費やしてしまったこともあった。

当NPOとして、取組1、2、3を並行的に進めていることから、ペース配分に苦労した面があり反省点である。



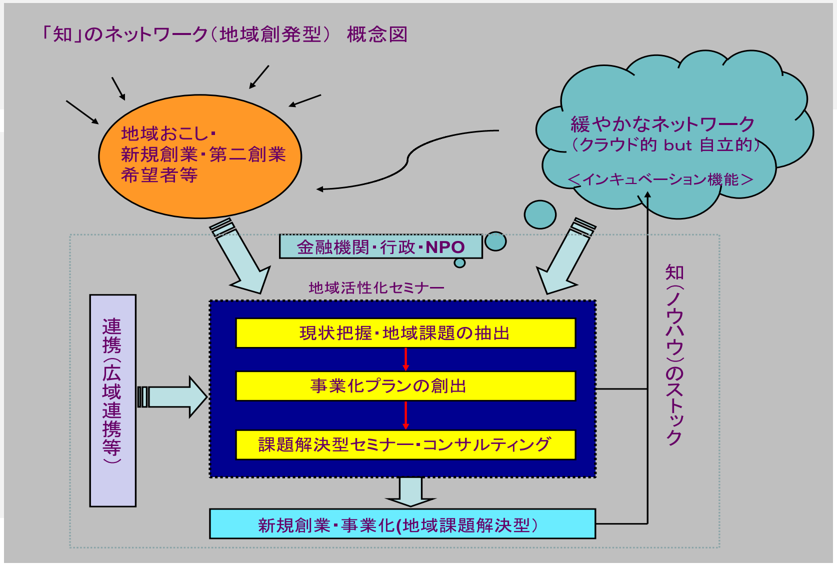
（博報堂松澤巧氏講演資料から）

今後の予定

◎今後の取組

今後も、今後もこの手法に磨きをかけて、中間支援に取り組んでいく。

具体化して来ているものについては、一層の支援をして具体化を図る。



◎活動費の確保と中間支援活動の自立に向けた事業展開

しんきん研究所は、飯田信金と飯田市のパートナーシップ協定に基づいて設立されており、飯田信金から支援を受け、飯田市とも連携をして活動している。まだ一部にとどまるが、しんきん研究所自体としても受託事業などにより収益を得ている。このようにいくつかの主体からの支援と収益により活動を続けている。

今後も飯田信金からの支援を継続して受けつつも、一方で、今回の国交省のモデル事業により、しんきん研究所として中間支援のノウハウを得ることができたことを踏まえて、受託研究や独自の研究を増やし、一層ノウハウを蓄積し、「自分ごと化」に込められたノウハウに磨きをかけ、しんきん研究所として自立の度合いを大きくしていきたい。